

大学史研究会の現状[1999年3月31日現在]

[退会] (五十音順・敬称略)

田中浩朗 服部伸 西山伸

[会員数]

個人会員 125名

機関会員 8機関

[大学史研究会事務局]

阿曾沼 明裕 (筑波大学大学研究センター)

大川一毅 (早稲田大学)

児玉善仁 (帝京大学)

進藤修一 (大阪外国語大学)

橋本鉱市 (学位授与機構)

飯野 靖夫 (日本鯨類研究所)

木戸 裕 (国立国会図書館)

坂本辰朗 (創価大学)

塙原修一 (国立教育研究所)

編集後記

『大学史研究通信』第16号をお届けいたします。編集子にはポジティブ・ネガティブとともに反響があるのが一番のねぎらいとなります。例えば前回からの新企画「新入会員自己紹介」は大変ご好評いただいております。そこで、企画をマイナーチェンジして「会員自己紹介」とし、対象を拡大したいと思います。最近新しいテーマに取り組みはじめたという方、自分と近い分野の研究者と協力体制を取りたい方等々どんな理由でも結構です。編集担当の進藤宛まで投稿お申し込みいただければ幸いです。

また、今回の通信では例会のテーマを募集しておりますが、同様に『研究通信』でとりあげるべきテーマについていろいろとご要望をお寄せいただけますでしょうか。どうしても事務局が中心になって記事を作成してしまいますので、「こんな特集を組んでほしい」とか「こんなこともっと会員にあきらかにするべきだ」等、こちらもどんなことでも結構ですからご教示下さい。

(文責:事務局 進藤修一)

(大学史研究会事務局)

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会
TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

(『大学史研究通信』編集担当)

〒562-8558 箕面市栗生間谷東8-1-1 大阪外国語大学外国語学部 進藤修一
TEL/FAX 0727-30-5355 EMAIL sshindo@post01.osaka-gaidai.ac.jp

大学史研究通信

New Series No. 16

(30. April. 1999)

会員住所変更

(敬称略・五十音順)

香川 せつ子

(住居表示変更にともない)

渡辺 和行

(渡辺会員は昨年7月に香川大学法学部から奈良女子大学文学部へ所属を変更なさいました)

新入会員

高橋 秀行 (神戸大学・流通科学大学※)

※新入会員自己紹介の欄ご参照下さい

辻 学 (関西学院大学)

〒662-0882 関西学院大学 西宮市上ヶ原八番地 11-15-111

(新約聖書学、「神学部」の歴史、大学人としてのアドルフ・ユーリッヒャー)

新入会員自己紹介

[個人会員] (敬称略・五十音順)

香川 せつ子 会員 (西九州大学)

私は、19世紀イギリスの女性高等教育運動について研究しています。これまで大学史研究というよりむしろ女性史研究の立場と問題意識から、自分の関心の赴くままに、ケンブリッジやロンドン大学の女性への開放に関する論文を書いてきました。大学史研究会への入会の動機は、本研究会が様々な研究分野の方々から構成され、「学問的対話と平等な人間的つながり」が維持された会であるということから、多くの学問的刺激と喜びを吸収できる場なのではないかと思ったからです。諸先生方の研究の内容と方法を学ぶと同時に、私もいつかイギリスの大学における女性の歴史について報告できればと考えております。19世紀の女性高等教育運動を支えたのは女教師とフェミニスト、そして彼女らに理解を示した進歩的大学人です。女性高等教育への要求や

期待、またそれを実現するための戦略は、三者の間で微妙に異なったものでした。大学人における大学改革の要求と女性への門戸開放がどのように絡み合いどのような関係性をもったのかを、大学史研究の成果に学びながら今後考察していきたいと思います。

高橋 秀行 会員（神戸大学経済学部）※

昨年末、大学史研究会に入会しました 高橋秀行です。よろしくお願ひ申しあげます。私の本来の研究分野はドイツ近代社会経済史、特に19世紀プロイセンの近代化・工業化過程であります。大学史研究とのかかわり合いは、プロイセン初期工業化期の政府による工業育成・振興政策を研究する過程で、プロイセンの工業技術教育の近代化に取り組まざるを得なくなつたことから始まります。その接点において、工科系高等教育—ポリテクニクム、工科系大学—の生成と発展を主題とする数編の論文を書いてきました。といいましても、大学史プロバーの研究者の方と比べますと、時期的にも対象的にも極めて部分的、断片的な仕事であります。今後、会員の皆様のご研究を通じて知見を広げたいと念じています。現在はドイツ地域工業化の展開、ドイツ技師協会史を主題とする研究に取り組んでいます。なお、本年3月31日で神戸大学を停年退官し、4月からは流通科学大学に移り、欧米経済史・経営史の教師として仕事を続行します。

（※高橋会員からは12月に入会確認をいたしましたので、通信15号に記事を掲載する予定でしたが、編集担当の手違いにより今号に掲載となりました。高橋会員には大変ご迷惑をおかけいたしました。ここに事情をご説明して陳謝させていただきます。）

辻 学 会員（関西学院大学商学部）

現在、関西学院大学商学部で、キリスト教学を講じています。専門は神学、とくに新約聖書学で、1995年に、スイス・ベルン大学プロテスタント神学部から、「ヤコブの手紙」の研究で神学博士号（Dr. theol.）を取得しました。この、いわば第一の専門と並行して、学問としての神学とキリスト教信仰との関係を考えるために、西欧（とくにドイツ語圏）における大学神学部の歴史にも研究の手を広げたいと考えています。最近、ゲッティンゲン大学神学部の新約聖書教授が、イエスの復活を否定し、さらには信仰の放棄を宣言して大いに議論を呼んでいますが、そのあたりの議論を歴史的に遡って考察してみたいと思っているところです。このテーマと関連して現在手がけていますのが、19世紀末から20世紀初頭にかけて、マールブルク大学で新約聖書学を講じ、イエスの譬研究の第一人者となった、アドルフ・ユーリッヒャーの個人史です。大学人としてのユーリッヒャーが、当時の大学について、また神学部の存在意義についてどのように考えていたのかを見ていくことにしています。

[機関会員]（機関名五十音順）

関西学院 学院史資料室（機関会員）

関西学院 学院史資料室の活動について

関西学院 学院史資料室事務長 山本 喜一郎

学院史資料室は、学院の創立90年に備えて、前年の1978年6月に図書館の一隅を借り、室長、主任、補佐の3名の体制で発足した。従って昨年、当室は開設20周年を迎えたことになる。学院の公の文書・記録、創立者及び学院関係者の諸資料等を収集、整理、保管及び運用することを目的としている。

翌1979年9月、「学院史資料室規程」が制定され、学院の正式な組織として位置づけられた。その年度末1980年3月、1年余の経験から当学院の歴史をふまえた独自の「学院史資料分類表」を作成した。これは現在の資料の分類整理の基礎をなしているものである。

その後も資料収集を継続し、1984年5月『関西学院史資料目録No.1』を発行し、その後概ね1

3. パソコン、ワープロを利用できる方は下記要領で原稿を作成して、フロッピーと印刷出力を送りください。事務局で一括して印刷しなおして版下を作成します（マッキントッシュ、ページメーカーを使用）。フロッピーは返却します。
手書きの方は、入力作業に多少の時間を要しますので早めにご提出ねがいます。

- (1) MS-DOSまたはマッキントッシュの文書形式で保存したフロッピーを希望します。
それが難しい場合は、適宜な形式で保存したフロッピーをお送りください。事務局で変換をこころみます。
- (2) 用紙はA4を縦に使用して横書き、字詰めは自由ですが、おおむね40字35行とします（刷り上がりがそうなるとは限りません）。
- (3) 第1頁の最初の5行ほどに表題と著者名（カッコ内に所属機関と部局名）を書き、1頁目にかぎり本文は6行目から書きます。
- (4) 図表は別紙とし、本文の挿入個所に図表をレイアウトする空白をあけます。図表はそのまま製版します。
- (5) 章、節の番号は大きい方から順に、I. II. III. ……、1. 2. 3. ……、(1) (2) (3) ……とします。
- (6) 使用する文字種は、全角の漢字かな英数字、半角の英数字、注番号に使う上付き数字などとします。英数字は、1文字（1桁）の場合は全角文字、2文字（2桁）以上連続する場合は半角文字を原則とします。外字の使用は控えてください。イタリック、アンダーライン、あみかけなどは、印刷出力にのみ指定を書入ね、フロッピーにはそうした指定なしの文書を保存してください。
- (7) 注と文献表は論文の末尾につけます。注番号は上付き数字の1) 2) 3) ……とします。
邦語文献は、書名、雑誌名を『』、論文名を「」でくくります。
外国語文献の書名、雑誌名は、印刷出力にイタリックの指示をしてください。

4. 原稿の締切などは、そのつど「大学史研究通信」に掲載します。常例では、執筆希望の申込が毎年4月中頃まで、原稿の締切が5月末頃となっています。
(今回は上記の通りです)

5. 原稿送付、お問合せは、事務局の紀要編集担当まで：
153-8681 東京都目黒区下目黒6～5～22
国立教育研究所教育政策研究部 塚原 修一
電話03-5721-5033
Fax 03-5721-5172

例会テーマを募集いたします

研究会活動の活性化のため、従来のセミナーではカバーできなかった様々な研究活動を試みるべく例会を開催してから3年目になります。これまで、若手の方々の研究発表、講演会、シンポジウム、体験を聞く会といった様々な形式を試みてきました。また以前には書評会を開催したこともあります。これらの会合は事務局が企画したものもあれば会員の皆様からのお申し出によって実現したものもありますが、私たちの研究会の規模から会員サービスということを考えれば、むしろ皆様のご希望に積極的に応えてゆくべきであろうと考えます。

そこで、5月以降、どのような内容の例会を組織すればよいか、ご提案をいただきたく存じます。例会として開催する場合は、(1)大学史研究会の会員がオーガナイザーや発表者・討論者になっていること、(2)研究会の活動目的にあった内容(広い意味での大学史研究や高等教育研究)であること、(3)公開、すなわち非会員の参加を歓迎すること、の三点を満たしていればよいわけです。

これまで例会が開催されたのは、東京、広島、西宮の各地ですが、これからはこれらの地域はもちろん、他地域においても精力的に開催できればと思います。5月以降の例会について、広く会員の皆様のお知恵を拝借いたしたいと思います。なにとぞご意見やご提案を事務局までお寄せ下さい。

なお例会とは別に、大学史研究会の会員にとって有益と思われる様々な研究会開催についての情報がありましたら、こちらも事務局までご一報いただければ幸甚に存じます。広報活動への協力を事務局で検討させていただきます。(坂本辰朗 記)

『大学史研究』第15号の原稿募集のお知らせ

『大学史研究』第15号の原稿を募集いたします。投稿規定をご参考のうえ、ふるってご応募くださいますようご案内申し上げます。投稿をご希望の方は、4月末日までに表題をお知らせください。原稿そのものの締切は6月初旬とします。(紀要担当:塚原修一)

『大学史研究』投稿・執筆要領および原稿の送付先は以下の通りです。
(毎回『大学史研究』に掲載している要領を転載)

『大学史研究』投稿・執筆要領

1. 「大学史研究」への会員の投稿を歓迎します。

2. 和文原稿は20~30枚(400字詰換算)の分量を標準とし、英文題名と英文著者名を記した別紙を添付するものとします。和文でない原稿も同様の分量(刷上り6~9頁)を標準とし、和文題名と和文著者名を記した別紙を添付するものとします。また、読者の便宜のため、充実した和文要旨を添付することをお勧めします。

年に1巻づつ1991年12月に至るまでNo.7及び暫定版と合わせて8分冊を刊行した。

1984年10月学院史資料室専用の資料庫が完成した。これは24時間空調の入った鉄筋コンクリート造2階建てであり、建坪100m²、書架の延長は842mである。資料庫に隣接して180m²の事務室を確保し、85年3月には資料と共に事務室の移転を完了した。

1985年12月『資料室だよりNo.1』を発刊し、後述の『関西学院百年史』の準備に至る1990年3月までに7号を続刊した。

学院創立百周年の前年1988年4月には、百周年記念事業として「記念出版委員会」の活動が本格化することになった。作業場を当室の一部に設置して、その事務を企画課と当資料室とで分担し、図録『関西学院の100年』の制作に着手した。そして翌1989年11月、百周年の年に刊行した。

さらに、1990年3月の理事会において「関西学院百年史編纂委員会」が設置され、その委員会の事務は学院史資料室が行う旨決定された。そしてその翌4月からその後8年に亘る事業が発足した。この間は教員14名の編集委員に加えて、編纂事業担当と資料の収集整理担当と合計8名の事務体制になった。

1991年6月百年史編纂に取り組みながら、『関西学院史紀要』創刊号を発行し、以来1996年2月に第5号まで刊行した。その後は百年史編纂の事業が輻輳し、一時休刊の止む無きに至った。

1995年度から百年史編纂の副産物として、年史編纂に関わった教員を中心に関西学院の歴史を学ぶ“関学学”とでも言うべき総合コースの講座が、大学の正規の授業として毎年開かれることになった。

一方で資料整理の進展と共に当初の分類表では予期していなかった資料も増え、区分し難い問題も生起してきたので、1993年3月『学院史資料分類表 改訂版』を作成した。その後1996年9月、改訂版の未解決の部分を改訂増補する意味で『同分類表 二訂版』を作成刊行した。

現在の学院史資料室の保有資料は約14,000点ある。この中で学院に直接関わる資料と共に、メソヂスト関係資料、とりわけ南メソヂストの西日本における活動の足跡に関する資料を多く保有しているのが、特徴であろう。

1997年10月、新大学図書館の完成に伴い、キャンパスの中央にある時計台の建物が空くことになった。これは学院の象徴的建物であり、今後記念館的な利用をしようという意味で、先ず学院史資料室が入ることとなった。1998年1月から時計台1階に、資料庫と共に事務室を移転し業務を開始した。事務室は83m²とやや狭小となったが、資料庫は156m²、書架延長1,845mに拡大した。

同年3月、漸くにして『関西学院百年史』全四巻が完成した。93年度に「資料編Ⅰ」を、94年度に「資料編Ⅱ」を刊行、1年の間において96年度に「通史編Ⅰ」を、続いて97年度末に「通史編Ⅱ」を刊行して完結した。この春をもって百年史編纂委員会は解散し、年史担当の事務局も消滅した。

年史編纂終了後、98年度は引き続き『関西学院史紀要』の復刊を目論んでいたが、予算の打ち切りのために実現しなかった。しかし、『資料室だよりNo.8』を復刊し、積み残しとなった百年史の索引作りに意を用い、独立した単冊の索引を年度末に刊行した。

2000年に学院は創立111周年を迎える。新しい世紀に向けて、99年度は「関西学院を語る歴史サロン」の開催や「紀要」の復刊等、新しい試みを模索している。

『関西学院百年史』(全4巻)

資料編I (学院創立前夜～大学設立)

654頁 3,000円

資料編II (上ヶ原時代初期～創立百周年)

746頁 3,000円

通史編I (学院創立前夜～上ヶ原移転、終戦)

654頁 2,500円

通史編II (新制～創立百周年、付年表)

738頁 2,500円

早稲田大学大学史センター(機関会員)

「早稲田大学大学史資料センタの設置と大学史研究」

菊池 紘一

明治期に創立された大学として、早稲田大学は比較的早い時期から大学百年史の編集刊行の体制を整えてきましたが、けっきょく長期におよぶ事業となり、全8冊(通史編5冊、別巻2冊、総索引・年表1冊)として1997年に完結しました。この完結を機に、編集業務にあたってきた大学史編所の経験と機能を活かすべく、大学アーカイブズへの改組の方針が打ち出され、1998年6月、「大学史資料センター」として正式発足しました。この間、大学百年史完結に呼応する形で、史学科教員を中心に1997年度早稲田大学史学会大会で「大学史への射程」と題する公開シンポジウムが開かれ、当センターの機能決定に影響を及ぼすことになりました。すなわち、センターは、大学アーカイブズとして大学および創設者大隈重信をはじめ功労者また校友等に関する資料の収集・整理・保存・公開を主要任務としつつも、大学史に関する研究活動を目的に加えることになったのです。もともと前身の大学史編集所時代に小野梓研究グループを結成して『小野梓全集』の編集および『小野梓の研究』の刊行等、研究実績を積んできましたが、新しいセンター規程では、これら大学発展の功労者の研究に加えて、早稲田大学史研究を深めるとともに、さらに視野を広げる形で「比較大学史研究を通じて大学の発展に資する」という一項が設けられています。こうして、現在、功労者研究としては「高田早苗の研究」プロジェクトが学内外の研究者の参加を得てすでに活動中であり、続いて「早稲田大学史研究」として「早稲田大学の学術研究史」プロジェクトを組織しつつあり、また同時に「比較大学史研究」として、1999年が新制早稲田大学発足50周年であることをふまえて、「新制大学史の研究——比較大学史的アプローチ——」プロジェクト発足に向けて準備しているところです。

大学史研究会ホームページの開設

すでにお知らせしましたように、去る3月に大学史研究会のホームページが学術情報センターの学会ホームページ(Academic Society Home Village)の中に開設されました。
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/>で学会ホームページに入りますので、そこから索引「た行」の中の大学史研究会をクリックしていただくか、直接、<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jshshe/>に行っていただく

「外地校研究懇話会」

(白線クラブ外地校研究懇話会と大学史研究会の共催)

本年度第1回の例会は本多二朗会員にお世話をいただき、東京・新大久保の白線クラブで旧制高校(外地校)出身の方々のお話をうかがうことになりました。本多会員作成の以下の案内文もありますように、本例会は白線クラブの外地校研究懇話会との共催であり、講師の吉村維廉氏は白線クラブの会員です。

日時 4月24日(土) 午後3時～
5時半から引き続き夕食懇親会場所 新大久保白線クラブ
〒169-0072 東京都新宿区大久保2丁目5-19

電話 03-3204-7789 FAX 03-3204-7813

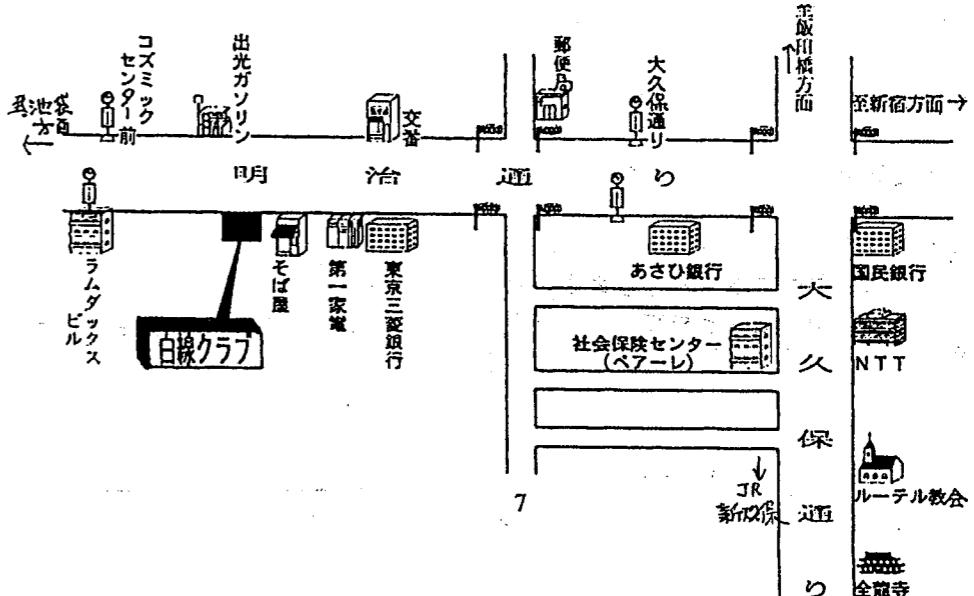
会費 前半の研究懇話会は500円
後半の懇親会は3,000円

戦前、日本が台湾、朝鮮、関東州(大連、旅順など)、満州などいわゆる外地に設立した学校ではどんな教育や学生生活が行われていたか、そこに学んだ学生たちが何を感じたか。在籍した人たちの想い出を聞く会を始める。白線クラブと大学史研究会の共催行事として学問的雰囲気での質疑などが予想される。第1回の今回は、吉村維廉会員(旅順)による外地校の全体概況解説に引き続き、満州の奉天農大→大同学院を卒業して満州國の林野庁に就職した金崇文さんのお話を聞く。

会場までは以下の地図をご覧下さい。白線クラブは地階にあり掲示が小さいので見落とさないよう十分ご注意下さい。

電車：JR山手線「新大久保駅」より徒歩約15分

バス：[早77] (新宿駅西口～早稲田) 又は [池86] (池袋～渋谷) 系統の都バスにて「大久保通り」又は『コズミックセンター前』下車。どちらのバス停からも徒歩約2分



ことで研究会ホームページを閲覧できます。

ホームページ開設にあたっては、学術情報センターとの折衝について、潮木守一会员にご尽力をいただきました。同会员からは最近のホームページの「充実ぶりは目をみはる思いがします」とのメールをいただきましたが、それだけに私たちの研究会のホームページも見かけではなく、学問的に充実した実質のあるものにしてゆきたいと考えています。

すでに『大学史研究』バックナンバーの注文など、ホームページへの反応もいくつか届いていますが、研究会の広報活動に資すると同時に学術的にも内容のあるものにしてゆくためには会員の皆様のご協力が不可欠です。なにとぞご意見と情報を寄せいただけますよう、宜しくお願ひいたします（坂本辰朗 記）。

インターネットで情報検索 (3)

Deutsches Institut für internationale Pädagogische Forschung(DIPF)

ドイツ国際教育学研究所ホームページ

<http://www.dipf.de>

今回紹介するドイツ国際教育学研究所は、研究活動の促進・助成と平行して、学術情報の提供にも力を入れています。大学史研究に関係があるのはこの研究所の「教育史」部門で、ベルリンにある「教育史研究図書館」Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschungが付設されています。

情報技術を利用した学術情報の提供は、ここ数年ドイツでもかなり熱心に取り組まれてきました。ワールド・ワイド・ウェブが開発される前は、図書館同士のネットワークを利用してさまざまな取り組みがおこなわれています(1)。CD-ROM のデータベースと連携して、検索した雑誌論文をその場で注文でき、しかも通常郵便、ファクス、図書館のオンラインプリンタに配信、E-Mail といったふうに配信手段もユーザーの都合で選択できるシステム(ノルトライン・ヴェストファーレン州の大学図書館連合が開発した発注システム JASON --Journal Articles Sent on Demand、詳しい情報は以下のアドレスで参照可能 <http://www.ub.uni-bielefeld.de/databases/jason/index.htm>)は画期的なものでした。すなわち、現在利用可能なあらゆる手段を活用して情報提供システムを構築しているからです。情報媒体とはそれぞれ特徴があり、その長所だけを組み合わせることにより、非常に利便なものができます。

このドイツ国際教育学研究所の情報提供も、この JASON と非常に似た思想のもとに作り出されています。つまり、情報提供手段をインターネットに頼るだけではなく、ペーパーメディアやフロッピーディスクを活用して、より快適な情報提供を目指しています。この研究所のホームページで教育史関係の論文のコピーを依頼できます。その際にユーザーは論文をオンラインで検索はできません。検索は、同研究所が編集している『教育史書誌情報』Bibliographie Bildungsgeschichte (ペーパーメディア) 及びそれにフロッピーディスクベースで付属している検索ソフトを利用しておこないます。論文を注文する際は詳しい書誌情報をいちいち入力するのではなく、この『教育史書誌情報』のなかのそれぞれの整理番号 ("95-100"というようなもの) を入力するだけよいのです。この方法によってオンライン検索の欠点 (画面が狭い、大量のデータを手早く閲覧できない、データベースの全体的概観ができない) を補うことができます。この『書誌情報』は Schneider Verlag という出版社から毎年発行され、定期購読すると一冊 50 マルク (一マルク = 70 円計算で 3500 円) と、手ごろな値段です。この本ももちろんホームページ上から注文できます。

この『書誌情報』が手元に届いたばかりなので、残念ながら実際に論文の注文はおこなったことがありません。利用記はまたあらためてお知らせしたいと思います。（進藤修一 記）

(1) この点にかんするさらに詳しい情報は、進藤修一「ドイツの大学におけるコンピュータ利用の現状について」『ドイツ語情報処理研究』(日本ドイツ語情報処理研究会) 第8号(1996)を参照下さい。

Universitäten in Deutschland. Universities in Germany. Herausgeber/Editors: Christian Bode, Werner Becker und Rainer Klofatz, München: Prestel 1995. 320 p. ISBN 3-7913-1496-3

早島 瑛（関西学院大学）

スイスの大学史家リュエック (Walter Rüegg) といえば『ヨーロッパ大学史』全4巻（註）の編者として著名であるが、このリュエックのエッセイ「フンボルトの遺産」(Humboldts Erbe. Die Hohen Schulen auf dem Weg ins 21. Jahrhundert) を巻頭において本書がここで紹介しようとする『ドイツ大学総覧』である。全巻にドイツ語と英語が併用されている。

いま本書を仮に「大学総覧」と称したが、内容的には「大学図鑑」とも言うべき大型の「写真集」(25x33cm) である。リュエックのエッセイに統いて各地の大学が大学都市のアルファベット順に配列され、全巻カラー写真。手にとって見るだけでも興味はつきない。1大学につき左頁に独語、右頁に英語の解説がある。小規模大学は1大学1頁。このうち、ベルリンでは自由大学、フンボルト大学、工科大学が、ハノーファーではハノーファー大学、医科大学、獣医科大学が、ケルンではケルン大学とドイツ体育大学が、ミュンヘンではルートヴィッヒ・ヴィルヘルム大学、工科大学、防衛大学が扱われ、アイヒシュテットはカトリック大学、カッセルなどは総合制大学、ハーゲンは放送大学、リュベックは医科大学、シュパイラーは行政学大学である。ここで扱われた大学のうち最大の大学はミュンヘンのルートヴィッヒ・ヴィルヘルム大学 (1994年冬学期学生6万人)、第2位ベルリン自由大学、第3位ケルン大学。ごく小規模の大学としてフェヒタ (Hochschule Vechta) やフランクフルト・オーダー (Europa-Universität Viadrina) があり、同期の学生数は前者が1526名、後者が1443名、ともに学位審査権と教授資格審査権をもつ。

以上が第1部とすれば、第2部にあたるのがバーデン・ヴュルテンベルク州の教育大学 (6大学)、ドイツ全国の神学大学 (14大学)、同じくドイツ全国の私立大学 (7大学) を対象とする3章である。ただし最後の私立大学のなかに1994年8月に設立認可記念式典を挙行したライプチヒ商科大学 (Handelshochschule Leipzig GmbH) は含まれていない。

第3部に相当するのがドイツの大学と研究体制に関する数字・グラフを含む「統計の部」である (解説あり)。グラフは非常に分かりやすい。たとえば第6章 (女性)。これによれば1993年の女性のアビトゥア試験合格者は48%、ほぼ男女同数であった。しかし同年の学生全体に対する女性の構成比は4割とやや低く、さらに学位試験合格者は3割、教授資格試験合格者にいたっては僅々1割3分にすぎない。また、都市人口にしめる都市ごとの学生数の比率を扱う第10章、医学、自然科学、人文・社会科学の分野別の中退者の比率 (8: 26: 37) に関する15章、1953年から91年までの学生の社会構成の変化を扱う17章、学生の生活費と収入源の内訳 (アルバイト収入など) の18章も興味深い。

本書はさらにリュエックのほか、ドイツ研究協会 (DFG) の総裁職にあるフリューヴァルト (Wolfgang Frühwald) や全国大学長会 (HRK) の会長エリクセン (Hans-Uwe Erichsen) などのエッセイ6点を含む。伊仏西英米はもとより、ロシアや中国、さらには中南米やアフリカの大学について同様の書 (英語併用) が出版されることを切望するものである。

註 : Geschichte der Universität in Europa, 4 Bde., München 1993ff. Bd. 1, 1993, Bd. 2, 1996, hrsg. Von Walter Rüegg. 英語版 Hilde de Ridder-Symoens (ed.), A History of the University in Europe, Cambridge University Press, vol. 1, 1991, vol. 2, 1996.